

本田財団レポート No.121

## 「市中の山居」～茶の湯の本質～

武者小路千家 (財)官休庵 理事長  
十四代家元 不徹斎

千 宗 守

財団法人 本田財団

## 講師略歴

千 宗 守 (せん そうしゅ)

武者小路千家 十四代家元 (財) 官休庵 理事長



### 《略 歴》

- 1945年 京都府生まれ
- 1970年 慶応義塾大学法学部政治学科卒業
- 1972年 慶応義塾大学大学院文学研究科修了
- 1989年 京都大徳寺にて得度を受け「不徹斎」の号を授かる  
武者小路千家十四代家元 宗守を襲名
- 1990年 (財) 官休庵 理事長就任
- 1998年 手塚山学院大学客員教授
- 1999年 関西大学文学部非常勤講師
- 2004年 大手前大学客員教授
- 2005年 大阪音楽大学大学院客員教授

### 《主な業績》

- 1994年 バチカン市国法王庁において教皇ヨハネ・パウロ2世に  
単独特別謁見を許され日本文化の代表として「茶の湯」  
を説明
- 1999年 日華交流茶会参加のため訪台・李登輝総統と会見  
そのほか世界の大学より招聘を受け「茶の湯」講演会を開催  
また欧米・中国などへ政府派遣の文化使節として活躍

### 《主な受賞歴》

- 1995年 近畿建築士協会賞＝親席「起風軒」
- 1997年 京都府文化賞功労賞

### 《主な著書》

- 1974年 『利休とその道統』 創元社
- 1979年 『新修茶道妙境』 創元社
- 1989年 『武者小路千家茶花集』 婦人画報社
- 1990年 『棚物と炭点前』 主婦の友社
- 1991年 『雪間の草』 婦人画報社  
『茶の湯講座』『趣味悠々ー茶の湯』 NHK
- 1995年 流儀機関誌『起風』 発刊 ほか多数

このレポートは平成19年9月12日パレスホテルにおいて行われた第103回本田財団の懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

## 茶の湯と茶道

今日差し上げました題は茶の湯の本質に関する話題で、「市中の山居」という言葉でございます。皆様方は聞き慣れない、我々の世界のテクニカルタームなのでございますが、その前にちょっとお断りしておきたいと思うのです。

茶の湯という言葉は私は使っておりますが、普段、皆様方は多分これを茶道という風にご認識になっているのではないのでしょうか。例えば職場の茶道部であるとか、学校の茶道部でご経験があるとかいうお話で、決して茶の湯部などとおっしゃいませんね。

ですからこの茶道という言葉が、我々の伝統的なお茶の名詞になっている。私があえてこの茶の湯という言葉を使いますのは、歴史的にはこちらがはるかに古うございます。実は茶道と申します言葉ができたのは江戸も末期でございます。それに、正しくは「ちゃどう」。茶の湯を表す場合は「ちゃどう」でございます。

「さどう」と言いますと、歴史的にはこちらが古いのですが茶頭と書いたり、茶堂と書いたり。これは時代によって変わってまいります。皆様方、忠臣蔵などをご覧になって、ことの発端の殿中の松の廊下がございますね。大名方がうろうろしておられる。あの中にちょうど私の袂のものと短いのを着て、ちょこちょこと剃髪で歩いている。少し言葉は悪いのですが、いわゆる茶坊主という人間をご認識になったと思うのですが、実はあの人のことなのです。

茶坊主と言いますと、いかにもあいつは茶坊主みたいだと、お上手を言う人のような蔑称になっていると思うのですが、実はこれが大変重要な役割をしておられる方でございます。江戸城というのは今で言えばもう霞が関、国会でございます。そして今の閣僚方とか議員先生方たちというのは、当然大名たちですね。その中で老中とか有力な閣僚たちが政治をいたしますが、なにせ根が殿様ばかりでございます。鷹揚なものでございまして、あまり細かいことはなさない。

ですから今で言う官僚さんのような役目ですね。文書を書いたり根回しをしたり、調整をしたり、その役目が実は茶堂さんだった訳です。読み書きはもちろん、算盤もしなくてはなりません。そういう頭脳に秀でていなければいけない。もちろん文章能力も秀でていなくてはならない、大変頭脳労働をする仕事であった訳です。各大名方のパシリと申しますか連絡にも走らなくてはならない。そういう江戸城の行政機構の中ではなくてはならない、しかし、あまり表には出ない。正式の職制としてはないのだけれど、彼らを除いてしまうとさっぱり機能しないというのが、実は茶堂役であったのです。ご存知の文豪の芥川家と申しますのは、茶堂の家柄でございます。ですから、おそらくあのような優秀な秀才がお生まれになったのだと思うのですが、そういう人たちのことを茶堂と言いますから、人稱名詞であった。職制の名詞であった訳です。それがいつの間にか、茶堂が茶道（ちゃどう）になってしまった。

「ちゃどう」から「さどう」へ

そして江戸の末期に何もかも「道」という字が付きます。儒教が朝鮮から入ってまいりました。特に武士たちがもう戦争をしませんので、武士たちの規律を締めるために、非常に儒教の長幼の序とかですね。それこそ、武士道とは死ぬことと見つけたり、という言葉もその頃できるのですが、そういう一つの倫理観を強めるために、何もかも「道」を付けました。剣術も剣道になりましたし、柔も柔道になりました。立花という生け花も華道という言葉ができました。皆、江戸の

末期に片っ端から「道」が付いていく。そして礼儀作法であるとか規範を教えるとか、非常にストイックになってから全部「道」が付いていく訳です。武士道という言葉もさようでございます。太平になってくると、普段の日常生活がどうしてもだれてまいりますので、それを締めるために儒教の考え方を取り入れて、「道」を付けたということです。

ですから、いずれにせよ「さどう」「ちゃどう」と言ってしまいますと、歴史的には古いことは含まれません。私が今日お話しするいわゆる私の祖先でもあり、今に残るわび茶の創始者とも言われている千利休のいた頃は、「ちゃどう」「さどう」という言葉、少なくとも茶の湯が「さどう」と言われていた形跡はございません。必ず茶の湯という言葉で出てまいります。

いささか古いお話もいたしますもので、私は茶の湯という言葉で統一してお話をしますが、それは皆様方がすでにご認識の茶道と思われても、なんら差し支えはございません。ちょっと冒頭にお断りをさせていただきたいと思っております。

## お茶の伝来

皆様方が普段お召し上がりのお茶は、ちょうど13世紀、鎌倉幕府が始まった頃に中国は宋から入ってまいりました。最初は禅宗と一緒に入ってまいります。と申しますのは、お茶というのは今でもそうですが、非常に覚醒性がございます。やはり眠たい時に飲みますと、パッと目がはっきりいたしますし元気になる。今はまたカテキンとか非常に栄養素が富んでいるというので、緑茶がブームになっておりますが当時はお薬であった訳です。

岡倉天心がちょうど100年くらい前に、今の藝術大学の東京美術学校を創りました。当時の美術界の大御所であります、その人が「茶の本」というのを著しました。当時、日本のアイデンティティーが失われつつあり、欧米列強に追いつけ追い越せの風潮の中で、日本という国のアイデンティティーをもう一つ確立しなくてはならないということで、「茶の本(The Book of Tea)」という、最初は英語で書きましたのでそういう題が付きましたが、その冒頭に「茶は薬用より始まりのち飲料となる」という言葉がございます。

私はこのワンセンテンスほど、お茶の全姿を言い当てて妙なる言葉はないと思っております。もともとはお薬でありました。禅宗というのは座禅をいたします。座禅の時は眠ってしまいますとさっぱりでございますので、何とか頑張らなくてはなりません。そのための一種の活力剤であった訳ですね。ですから当然禅宗と一緒に抹茶を飲む習慣が入ってまいりました。

そして最初は禅宗寺院と、禅宗を受け入れ帰依した支配層の武家たちがお茶を飲んでおりました。ですから最初は鎌倉です。禅宗は当時日本から見れば新興の宗教です。伝統仏教というのは当然奈良仏教もそうでございますし、真言、天台などがもうすでに権威としてございましたから、なかなか禅宗という新しい仏教が入りづらい。栄西さんというお坊さんが入れるのですが、当然、天子様のおられる京都の都で広げなかった。それがかなわずに、当時、政府の中心を関東へ持ってきていた源氏の幕府の方へ働きかけるのです。

当時は頼朝さんの次男坊の実朝という人が政権の担当をしておりました。彼は本当は次男ですから三代目ではないのですが将軍としては三代目でした。「売り家と唐様で書く三代目」にぴったりの人で、政治家としてはとにかく、文化人としては非常に優れた人でしたのでそういうものにすぐ飛びつきました。幸い自身が非常に体が弱かったもので、特に薬用という部分にひかれま

してお茶を飲み始めるのです。それが武士たちがお茶を飲み、そしてそのお茶から禅宗の方へ目を開かれるという嚆矢になる。端緒になる訳です。やがて、その源氏も滅び後の北条氏も滅んで、そのあとを継いだ足利氏がこの関東の地から、また政治の中枢を京の都へ戻したことから、京の都で禅宗が始まるのです。今で言う京都五山。相国寺でありますとか、天龍寺でありますとか、東福寺でありますとか、いわゆる位の高い禅宗のお寺は鎌倉の後にできる訳です。そして、お茶を飲むという習慣もそれから入ってきます。

## お茶と禅宗

どうして座禅の時の元気付けのお茶が、今のような形になったかと申しますと、実は少し禅宗のお話をしなくてはなりません。禅宗というのはそれまでの伝統仏教とは明らかに一線違います。それまでの伝統仏教ですと、例えば天台、真言でも護摩を焚いたりして、なんらかのご利益を願うそれを実現させるための、非常に祈祷性が強いのが特徴でございます。

例えば浄土宗などは当時、平安貴族たちが大変信じておりました。阿弥陀様信仰というものです。ひとかどの貴族でありますと、邸内に持仏堂を持っておまして朝な夕な礼拝をする。特に臨終の時などは、その阿弥陀様の手から五色の糸をずっと引っ張ってまいりまして、場合によっては臨終の人を阿弥陀堂へ運んでその前へ寝かせました。その阿弥陀様から来る五色の糸をずっと握って、阿弥陀様に極楽浄土、西方浄土に案内してもらおう。そして輪廻思想というのがありましたから、願わくば次に生まれてくる時も同じような貴族階級に生まれたい。決してしいたげられるような階級には生まれたくないと願って、日夜礼拝をしてきましたから、最後にそれをお願いして死ぬというのが普通仏教であった訳です。

禅宗は一切そういうことをいたしません。祈祷ごとは一切なし。場合によっては仏像すら置かないこともございます。では何をするかと言うと、ただただ座禅という、いわゆる瞑想をいたしまして、いろいろな自分の悩みを自分で解決する訳です。ただ、もちろんそのためにはヒントを与えてくれたり、一種のショック療法を与えてくれるような老師と称する師匠はおりますが、ほとんどは自分でものごとを考える。一種の哲学と申してよろしいでしょう。後ほど西洋で成立いたします哲学と言っても決して過言ではないような宗教でございます。

ところが、それが武士階級たちは、やはり実力主義であります。平安貴族たちが門閥と家柄と格式で成り立っていたのとは正反対に、武士たちは自分の腕力で成り立っておりますから、自立性ということですね。そのものの考え方、自分で考え自分で物事を解決するという自立性が、非常に当時の新興の武士たちの気持ちに合いました。そして自分たちのメインの宗教として、彼らも禅宗の作法に従って座ります。

座禅のご経験がおりになる方はおられますでしょうか。大抵お一人かお二人、あるぞとおっしゃる。ああ、やっぱりお一人いらっしゃいました。どうでしたか？最初からお気持ち良くお座りになれましたか。最初はいろいろご抵抗がおりになりますよね。

本格的ですと1週間近く不眠不休で座るのですが、普通1時間ないし1時間半くらい座っては15分くらい休みがある。それでまた次へ座っていくのですが、最初の頃はその休みの間にお茶を飲んでいたのでしたね。その時初めてベテランの師匠たちとお話ができる。そして、また次の座禅へ入っていく。それを繰り返していく訳ですが、そのインターバルの間に飲むお茶、そしてイ

ンターバルの間に交わす会話。実はそれがいつの間にか茶会の原形となってしまったのです。

### ディスカッションの場としての茶会

当時は非常に身分社会が激しゅうございますから、皆が対等になって話し合うということはない訳です。支配者たちは当然上段の間におりますし、ましてやお師匠などというのも上段におります。しかし禅宗だけは、師匠もそしてそれを教わる弟子たちも、座禅をする時はまったく同じ平面に座り、フィフティーフィフティーになって一碗のお茶を喫しながら、いろいろディスカッションができた訳です。このディスカッションという話し合いをすることも、当時の日本にはなかった訳ですね。

それこそ私は今スピーチと言ってこうして講演しておりますが、今ではこれは当たり前のことでございます。しかしその頃というよりも、日本は長らく明治の前までは、こうして言葉でお話しするという事は、非常に感心した事ではなかったのです。すべて文書。平安時代は和歌、大和歌で自分の気持ちを表した。言葉でものを表現したりするという事はたまに例外はございますが、非常に卑しいこととされていた訳です。

スピーチを演説と訳されたのは、慶應義塾を創めた福沢諭吉先生だという話を聞いたことがあります。西洋人たちはそれこそギリシア、ローマの頃から演説というものを非常に大事にしました。その伝統から人様の前で口で説明するという習慣を今でも大事にいたします。

アメリカでは、小学校の時から人前で説明をするという訓練があるようで、何か意見があるかと言うとほとんど全員が手を挙げる。日本人はあまり手を挙げませんね。何か意見がありますかと言いますと、周りを見て結局やめておくかというのが多いのですが、彼らはパッと一斉に手を挙げます。そういう教育をするのもギリシア、ローマ時代からの伝統であります。日本はそうではございません。奥ゆかしいのでございますね。

特に京都の朝廷では、まず天子様は絶対にこのようにべらべらしゃべることはありません。まさに竜顔、竜の顔をうかがう訳ですね。天子様は御簾の奥におられる。そして顔色をうかがって、自分の言いたいことを和歌に書く。そして差し上げて、取り次ぎがいて、天子様のいわゆるご意向をうかがって、そしてまたそのご返歌が来る。そして、それを見て、また臣下たちは感じて、さらに下の者にその和歌を見せて、自分の意思を伝達する。上意下達という方法を採用していました。

そういうお互いが話し合うという機会がなかったのですが、禅宗の中だけは中国から直に入ってきたからでしょう、その習慣がありました。そして一碗の茶を喫しながら、いろいろディスカッションをして、そしてまた次へ移るということですね。実はそこに今の茶会の萌芽があった。芽があった訳です。

### 「堺」～茶会を商売に取り入れた町～

その部分を非常に積極的に取り入れたのが、ちょっと時代が下がるのですが今年の春に政令指定都市になりました、大阪の堺市というところでございます。当時は堺という町で、今で言えば、成田空港と関西空港と、神戸港と横浜港を合わせたような、いわゆる貿易の基地でございます。当時、中国や朝鮮、そして東南アジアの国々と貿易をしておりました基地になるところでござい

ます。その堺という町の商人たちが、いち早く禅宗のお茶を飲みながらのディスカッション性を、また次の座禅へ移るというシステムを上手に取り入れました。貿易商人ですから、中国のものを取り入れるのはお得意でございます。そして最新の宗教でございましたから、そういう意味でも非常に禅宗というものに食指を示しました。実は、堺という町は突然できあがったのです。

本当は博多が、そして今の神戸港の前身であります大輪田泊というところが貿易港でありましたが、中国の守護大名であります大内氏が力を付け、あの辺を全部席卷しましたもので、特に京都を中心とする朝廷でありますとか幕府が使えなくなりました。ですから急遽それに準ずる場所として、当時、漁村でありました堺港に目を付けまして、そこを貿易の基地にする。そして一気に方向転換をしまして、そこに商人たちを住まわせて貿易を続ける訳です。

その堺の商人たちは、当時の外国人たちを相手にしなくてはなりません。やはり言葉で取り引きをしなくてはなりませんから、そういう茶の湯の集合性に目を付けまして、いち早く禅宗の中の茶礼という、今でも禅宗の寺院では毎日しておられますが、その茶礼というものを取り入れて、お茶を飲みながら商談をする訳です。

外国人を呼んでやるのですが、国内にいろいろ物を売る商談をする時も、堺の商人たちはひとかどの商人は皆、今で言う四畳半くらいの部屋を持っておりました。その中に多くの人たちを招き入れ一碗の茶を飲みながらやるのです。貿易商人たちですから、外国の珍しい美術品はたくさん持っております。中国伝来の青磁でありますとか、天目でありますとか珍しい器を使ってお茶を飲みながら商談をする。いわゆるディスカッションをする。

肝心の座禅の方とはとにかくしておいて、茶礼の部分だけです。本当は付属に付いていたものですが、その付属物を上手に取り入れて、茶礼をさらに昇華して、今のような茶の湯の前身にしていたのが堺という町でありました。

## 「堺」の発展

やがて堺という町が大きく飛躍をいたします。それは偶然にもポルトガル人が種子島に来航し、そしてあの鉄砲というものを伝えたことによるのです。もし鉄砲伝来がなかったら、茶の湯は今日の形ではなかったと言われるくらい大変な衝撃を受けます。

今でも日本の自動車は世界を席卷しております。最初は全然そのような萌芽もないようなところに突然完成品が入ってきて、それを徹底的に調べて、そしてそれ以上のものを作り上げる能力が実は近代だけではなくて、もうすでに450年も前にありました。それが鉄砲だった訳です。

この鉄砲というのも、当時、画期的な武器で、今で言えばもう核兵器みたいなものでございます。弓や矢やなぎなたでやっていたのに、飛び道具ですね。火薬の力で、しかも破壊力がすごい武器を見て、日本人は怖じけるどころか、これを造ってやろうという気概を覚えたのです。

堺という町がそれに成功いたしまして、世は戦国時代であります。最新兵器は飛ぶように売れる訳ですね。あっという間に巨万の富を得ました。我々関西の人間は残念なのですが、戦前は大阪が金をたくさん持っておりましたが、今はもう見る影もございません。第一、銀行さんの大阪の本店さんが全部、東京へ来ておられますそうですね。約7割、いかがでございましょうか、7割はこの大東京に集まっていると思うのですが。ある経済史の先生の試算によりますと、なんと堺は9割5分以上の富を持っていたと言われております。

当時、京都と言いますと天子様がおられる権威の町でした。奈良などはこんなことを言うと奈良出身の方には怒られますが、もう廃墟であります。それから大阪もまだ町ではございません。今の大阪城があるところに石山本願寺があっただけです。堺という町だけが物を生産してお金を、しかも大量のお金を得ることができる町でありました。

いま、自衛隊などで使っております小銃は1丁いくらしめますかと聞きますと、売ってはもらえませんが30万くらいであるそうでございます。なんと当時、種子島1丁は、現価に換算しますと1000万くらいするのです。それがやはり戦争がありますと飛ぶように売れます。そして品質管理なんてありませんからすぐ駄目になるはずで。そうすると、また作り換えるということで、まさに消耗でございますね。それであつと言う間に9割5分の富を儲けました。

## 戦国大名による茶会

それに目を付けたのが信長という大名でございます。彼が一番鉄砲を機能的に使いましたから、堺の武器生産能力と、あり余る富をなんとか物にしたいということで、堺に食指を伸ばすのです。信長は望んだものをどうして手に入れたかと言いますと、皆さんご存知のように圧倒的な兵力で殲滅作戦をする訳です。ローラー作戦で相手を皆殺しにします。堺などは商人しかいないはずですから、本当はその手を使ったら良いのですが、堺がそういかなかったのは、今で言う抑止力が働いていた訳です。

堺はご紹介したように武器は最新兵器が山ほどあります。お金もあります。商人たちは戦闘能力がありません。そして当時は戦国時代ですからほとんどの大名が負けていく。甲子園のトーナメントと一緒に、最後に残るのは1校だけでございますから、浪人が山ほど出る。そうすると当時の日本としては珍しく、その優秀な浪人をあり余るお金でスカウトしてくる訳ですね。

信長の軍隊は4、5万といましたが4、5万も要らない訳です。最新兵器で固めた1000人か2000人の軍隊を雇って、ハリネズミのような重武装をいたしました。もちろん最終的には信長が勝つでしょう。しかし同時に、信長は回復にはかなり手間取るような痛手も被るぞという威力を見せる訳ですね。今、どこかの国が持っているか持っていないか、有効かどうか分からないような核兵器のために、大国のアメリカがやっぱり遠慮しておりますな。まさにあの構図であった訳ですね。数は少ないけれど、必ず相手に痛手を与えるぞという武力をちらつかせて、なかなか言うことを聞かん訳です。

信長も知恵者ですから、あの堺の商人たちを引きずり出すのはどうしたらいいか。そうすると、彼らがやっているあのなんとも言えん、一杯の茶を飲みながらごてごて言うてる。あれを自分もやればいいんじゃないかということに気が付く訳ですね。

信長は新しいもの好きで、非常に好奇心の旺盛な男です。しかも外国のものを当時良く使っておりました。外国と言いましても、中国、朝鮮のものです。それを自分も買い入れまして茶礼の真似事をします。そのための大名家来を雇う訳ですね。明智光秀、そして細川藤孝という、いわゆる腕っ節だけではなくて、鎌倉幕府創設以来の名門の家柄で、かつ宮中の有職故実にも非常に明るい。茶の湯とか、そういう元来の鎌倉時代から伝えてきた文化にも非常に明るい二人の大名を雇いました。

そして彼らがコーディネートした茶会で、堺の商人たちを京都あたりへ呼ぶ訳です。信長も時



には忍びで堺の町に行ったりしておりますが、表面はあくまで茶会をするという名目で行きまして、いわゆるネゴシエーションをする訳です。その時のコーディネートをしていたのが、実は利休たちであった。利休一人ではありません。堺の商人は皆、茶の湯をいただきます。それもやはり武器商人がどうしても有力になりますから、武器商人でありますような商人たちが、茶会のコーディネートをしていました。そして信長と非常に上手くいって、信長に武器とあり余る資本をどんどん提供する訳ですね。そして信長はさらに天下統一を進めていくのですが、ご存知のように、後ほど雇った明智光秀という家来に弑されてしまう。いわゆるテロに遭う訳ですが、その後急に飛び出してきたのが秀吉です。

## 利休の台頭

秀吉は太閤さんと言って特に関西では大変尊敬を受けるのですが、あの人はもう戦略的にはまったく信長のアイデアを実践したに過ぎません。ですから当然、堺の武器生産能力と資本は欲しいので堺に食指を伸ばしたい訳です。そうすると、やはり堺も、堺という町が一つの国ですから、それまでは有力な武器商人たちが特命全権大使として信長とあたっていた訳です。ところが信長が死んでしまいましたから、その構図がまったく崩れてしまった。秀吉というのが飛び出してきたので、今度は秀吉と交渉しなくてはならない。堺の方もまさか秀吉が出てくるとは思っていなかった。我々は後知恵として、スムーズに秀吉が天下を取ったことを知っておりますが、当時はやっぱり誰が取るかは分からん。ひょっとしたら光秀の天下になるかも知れなかった。他にも有力な大名がたくさんいた訳です。ところが秀吉が取ってしまった。あの秀吉が堺の武器と資本を欲しがっている。そうすると、こちらも誰か今までの有力な武器商人たちに代わる、秀吉と親しい人間を代表に立てて交渉しなくてはならない。実はそれで飛び出してきたのが利休だったのです。

と申しますのは当時、信長の陣営では茶の湯をするということは一流の武将の証であった訳です。その茶の湯の会でいろいろ会議に参加できるのが、信長が信頼していた大名でしたから、秀吉もやっとその末席に連なっていた訳です。利休もそういう大金持ちの大先輩たちです。利休の家は武器商人ではありませんで、倉庫業をいたしておりましたから、商人たちの間では末席の方でございました。まだ末席に連なって交渉に臨んでいました。末席同士で非常に仲が良かった訳です。むしろ、その会議の席には利休の方が一足先に出ておりましたから、秀吉は手紙を出していろいろ利休に聞いているのです。

利休は宗易という名前を名乗っておりました。私の宗守の、宗という字。私の名前から取っておられるのではなく、私が向こうの名前を取っておるのでございます（笑）。前後関係、因果は逆でございまして、本名は宗易という名前を使っておりました。その手紙のあて先には、宗易公と書いてあるのです。そして秀吉と署名。当時、羽柴秀吉と言いました。あて名が宗易公、そして秀吉と署名をして、いろいろ茶会のルールを聞いているのです。自分もやっとならぬように茶会に出られるようになったので、どういうことに気を付けたら良いか。そういうことを聞いているのですが、宗易公という尊称を与えて遠慮している。ですから信長存命中は圧倒的に利休の方が、交渉の席では立場が上だったのです。非常に仲が良かった。

そして秀吉があっという間に天下を取ってしまっ、堺の総意としては確か宗易が秀吉と仲良

くしているから、宗易に任せたらどうかということになった。そして利休が、堺の權益を代表して秀吉陣営とあたるようになった訳です。「秀吉と利休」という小説もございますように、二人はタイアップをいたしまして、天下統一への道を進みます。

やがて最終的になりますと秀吉はなかなかの知恵者でして、血を流さずに、例えば島津でありますとか伊達でありますとか、ああいう大名たちや地方の豪族たちを傘下に治めるようにします。それも茶会に呼んで根回しをした上で、改めて正式に帰参を許すという形です。茶会の席で本音を全部言わせてしまう訳です。そして実際に大名たちが居並ぶ公の席では、もう形式的なことしか言わないのです。伊達とか島津はどうしても帰参が遅れましたから、秀吉の陣営に入るのは不利なのですが、そういう条件を全部茶席の方で済ませておく訳です。そして入ってくる。

### 教養としての茶の湯

やがて、それらも傘下に入れて秀吉の天下になりますと、今度は秀吉は国を治めるために、荒くれ大名たちの気持ちを内へ向けるようにしなくてはなりません。いわゆる行政的手腕を発揮させるようにする。それまでは首をなんぼ取っていくらという連中ばかりでしたから、そういう連中に行政手腕を身に付けさせ、そのためには読み書き算盤ができるようにしなくてはなりません。

これはもう切れる連中ではありますが、当時は教育というものを受けておりませんから、そういうことはさっぱりだったのですが、やはり文書も書かなくてはならない。字も読まなくてはならない。そういうことがありますから、インスタント教育方法として茶の湯を用いたのです。

茶席に入りますと字を読まなくてはなりませんし、気の利いた会話もしなくてはなりませんし、いろいろな知識が必要になります。それも、割とダイジェストで手に入れることができる訳ですね。当時の最高教養は、先ほどもお話ししました和歌、大和歌であります。しかし、これは非常に多くの約束事がありまして、習得するのにやはり子どもの頃から、もう10代の前半くらい、おつむの柔らかい内からいろいろ訓練して、有職故実の約束事を全部詰め込んだ上でないとできません。そんな時間はない訳ですね。

例えば加藤清正でありますとか福島正則でありますとか、ああいう連中にとっては、そんな時間はない訳です。しかし彼らも一国一城の主ですから、行政官としてある程度の教養は身に付けなくてはならない。そのために大いに茶の湯をやらせたのです。果たせるかな、清正も正則も文書を書いております。それから、お茶をすくう茶杓という竹のスプーンがございます。あれはなかなか作るのが難しいのですが、彼らはそれを手伝ってもらったにせよ、それを作ろうという気があった証拠に彼らの作品が残っております。これは大変な集中力だと思います。

彼らが茶の湯を始めて一人前になるまで、そんなに時間はかかっていないのです。ある程度、大成してから茶の湯に接しておりますが、わずか2、3年の間に清正や正則のような荒くれ大名も、ある程度字も読めるようになりましたし、そして書くようになりました。ましてや茶道具まで作るようになりました。と言うのは気持ちがぐっと内へ向いてきたのです。それまではもう、それこそトラを退治してなんぼというようなおっさんでありました（笑）。人の首を取って首狩り族みたいなものでしたけれど、それが内へ内へと入ってきた訳ですね。

そして気持ちを内側へ鎮めるように、利休は演出をして秀吉に尽くしたのです。

## 濃茶のイニシエーション

それのもっとも典型的なのが実はお茶の飲み方です。皆様、濃茶というのを飲まれたことがあるでしょうか。普通召される抹茶の、最低5倍の濃さはあるお茶でございます。大変な濃さですが本当はおいしい、甘いお茶なのです。それまでは一人ひとりに点てて飲んでいたのですが、例えば5人なら5人分をいっぺんに点てて、同じお茶碗から、しかも同じ飲み口から飲んでいくということをしたのです。いわゆるイニシエーションです。皆さん、これはどこから考え出されたのでしょうか？

それではないのです。日本人というのは、食生活に関してははすごく潔癖なのです。西洋の人たちはナイフ、フォークですね。食後は洗ってまた使う。エリザベスさんだってそうしていると思います。フォーク箱や、エリザベスと書いたナイフ、フォークはないと思います。日本人は違いますね。ご夫婦だって恋人だって、お箸箱というのがある。たまに「あーん」と言ってやる人もあるかも知れませんが、大抵お箸は別でしょう。それと、昔は箱膳と言って、食器は絶対に他人の物を使わなかった。今、なべ料理というのが非常にブームです。一時代前の私の母などは大正9年の生まれで、京都で生まれて京都から出たことがないような女子でございましたが、もう非常になべを嫌いました。あれは人のお箸が入るからと言って。あほう、それがいいんじゃないと言って良く喧嘩をしたのですが、それくらい日本人は食生活に関しては、潔癖な個人主義なのです。ところが突然に、その時代までそんな習慣はないのに、突然、茶の湯の席で、一碗の器から同じところから飲めと言う。

このような話があります。石田三成は、大谷刑部という大変有能な、しかしハンセン氏病にかかっていて、ほとんど死に体の大名がおりました。これが徳川家康側に付くことになっていたのですが、やはり知恵者ですから自分の陣営に欲しい。それでお茶会をする訳です。三成も秀吉の子飼ですから、もうなんでもお茶会をする。そして濃茶を点てて大谷刑部に飲ませる訳です。大谷刑部はお茶を飲みますがハンセン氏病ですから、お茶碗の中にうみが落ちてくる訳です。それを石田三成は飲んだというのです。それで大谷刑部は痛く感激をして、負けは分かっている石田三成に付いた。これは最近小説でもどんどん出ておりますから、皆さんご存知の方も多いですが、それくらいほっとしてしまうのです。

これはまた話が別なのですが、松永安左エ門さんという、電力の鬼と言われた大財閥のおじいさんがいました。このおじいさんはお茶が好きで、毎朝社員を呼んで濃茶を飲ませるのです。ところが、おじいさん鼻をだ一とたらしながら。（笑）茶碗の上にご顔を持ってきて点てるので鼻が入っていくのですって。それに構わずおじいさんは点てる訳です。毎日、社員さんはそれを飲まされてはったと言うのですけれど、これも、ええかげんなもんですね。もう人権蹂躪ですね、今やったら。（笑）これは後世の笑い話ですが、それくらいイニシエーション性が強かったのです。

## ミサから生まれた濃茶

これは利休が考え出したことなのです。しかも利休が亡くなる2、3年前に、突然考え出す。記録にも残っているのです。「一碗から飲めとおおせ候」という文書が出てくる訳ですね。秀吉も、よし、それでいこうと非常に気に入ったという。突然、表れるのです。それが本当に気に入

ったのなら、例えば食器をまた一緒にするとか、なべ料理が流行るとかありますが、相変わらず江戸時代に入りますと儒教の思想も入ってきて、日本人は食生活にますます敏感になる訳です。

どこからヒントを得たと思われますか？キリスト教、カソリックのミサなのです。皆さんが想像されるように、当時カソリックは近畿地方に布教しておりました。高槻という、大阪と京都のちょうど真ん中にある町には、高山右近というキリシタン大名がおりました。彼の領地は99%キリスト教、当時はカソリックです。カソリック信者と言われていました。我々京都の家の周りにも、天主堂跡というのがいっぱいあるのです。教会があった証拠ですね。だから京の都にもありましたし、ましてや堺の町はバテレンたちが一番最初に上がってくる場所ですから、もう日常茶飯ミサがある訳です。

利休の家族たちも信じていたという話もございますし、利休自身もその目でカソリックのミサを見た。いわゆるキリストの血でありますブドウ酒を、カリスという器に入れて飲んでいく。それを司祭という神父が自分が飲む。そして周りに集まった信者に飲ませる。そしてまた器を拭いて次の信者に飲ませる。そういうふうな飲み回しをしていく儀式がミサの中にあるのです。それと同時に、キリストの肉でありますパンも口にしてあげる訳ですが、これがミサの中では非常に大事な儀式であります。おそらく利休はそれを見ていて、このイニシエーションは使えると思ったのです。

ところが日本は、江戸に入ってからキリスト教をまったく弾圧してしまいましたから、あらゆる資料を全部抹殺しましたし、痕跡が残っておりません。我々のDNAにも、キリスト教と言うと明治以後に入ってきた外国の宗教という気がありますが、とんでもない話でございまして、もうすでに450年前に非常に深く入っておりました。

宣教師たちが全部その頃の記録を、今でもそうですが、ローマカソリックというのは、宣教師たちがバチカンへ報告書を送る習慣がありました。バチカンの書庫はそれはもうあらゆる記録でぎっしりだと言いますが、実はどうやらその中に利休がそれをしたという記録があるようです。日本側にはまったくその資料はございません。歴史の学者の先生たちは仮説を嫌います。仮説を言ってものを立てると学者生命を絶たれますから、非常に恐れられて言われません。

私は一介の茶人でありますから、法に触れん限りは何を言うてもいいと思っておりますので、そのことを書きまして、ある神父を通じて英訳して、バチカンにお送りしたのです。グレゴリオ大学という神学専門の大学がバチカンにございまして、その学長さんのところへ送りました。

「そんなことを日本が言ってきたんは初めてや。しかし、自分たちの収蔵庫には間違いなくそのことがある。今まで誰も言ってこなかったのが不思議や。あんたが初めてそういうことを言ってきた」ということで、実は先ほど事務局長さんのご紹介にあった、私ごとき一市民がローマ法王、当時、先代のヨハネ・パウロ2世にお目にかかれたのも、実はそれが機縁だった訳です。是非、本人からそういう話を聞いてみたいという法王の思召しで私たちはまいりました。

その時に言われました。「まだ法王庁の文書は正式な公開はできないが、あなたの主張しておられるその意見はまったく我々が裏付けるから、どうかそれは言うて欲しい。」私もそれを信じてこのように言っているのですが、まずそれしか考えられません。状況証拠はまったくその通りです。そういう潔癖な食生活のある国に、そのお茶碗、しかも茶会のお茶碗だけに回し飲みをする。あとは全然関係ない。相変わらず潔癖だということです。ということは、何かに影響を受け

て、その時だけにあったということ。その気分になったからできることなのです。

よく「千公のお茶会な、わし、あの雰囲気が好きで行ってんけど、あの濃茶というの。どこの誰やらと分からん奴が飲んだやつを飲むお茶。あれ、かなんねん。もう、あれがあるから、わし嫌やねん」とおっしゃる方がたくさんおるんです。ある時、行ったら入れ歯が浮いていたのなら、それはそうなるかもしれませんが（笑）、そう思われますよね。だからやはり気心が知れると、いっぺん濃茶をするといいみたいですね。非常に一体感がある。

そのようにして、利休は演出を考えに考えて、大名たちの心を一つにしようとした。そのために創意工夫をして実は今の茶の湯に残っている。いろいろな儀式のもとなのです。

「市中の山居」とは

もちろん、それから400年以上たっておりますから時代も変わりますし、政治形態も変わるのですが、実はそもそもの茶の湯が別世界を感じられる。そうしてその4、5人の人間が一体感を持つことができる。そして、このように世の中が大きく変化していくにも関わらず、その方式が全然変わらないということは、やはりそのイニシエーション性が非常に強いということなのです。狭い四畳半くらいの部屋で4、5人の人間が集まって、一碗の茶を喫する。それがやはりこの別世界を、しかも街中中です。決して隠遁の生活ではない。

「市中の山居」と申しました。当時、京都はすでに人口が30万近くありました。ロンドンやパリがまだ15万か20万の時代ですから、これはもう世界的な大都会です。当然ものすごいストレスがあったはず。しかし、この都の中でそういうことをする。当時は東京のようなところでしたが、その中で、その四畳半の中だけは別世界。その代わり時間を限っています。ふた時という今で言えば4時間くらい。その間だけは俗世間のことから一応離れてやろうではないかということになったのです。

ご案内に書いておきました和歌があります。「山にても憂からぬときの隠れ家や 都の中の松の下庵」。これは実は利休が生まれます1世紀近く前の歌なのです。当時、もう京都は申しましたように世界的大都会でストレスの塊でありました。その歌を詠んだのはお公家さんであります。当然、政治の世界にもおりますから、俗世間の影響をもろに受けている訳です。

いろいろストレスが起こると、今の東京で言えば軽井沢とか那須とか、そのような別荘地へ逃避する。京都で言えば大原でありますとか嵯峨野、嵐山のあるところなのですがそこへ行く訳です。しかし行ったら、一人になって山の中に入ってみたら一向に……。ありますよね。例えばちょっと気分転換のために一人になる。しかし余計心配する、夜になって寝付けない。

皆様方は恵まれた方ですから、そんなお悩みはないと思うのですが、私などは時々夜寝付けず、朝4時ごろ起きますと、ああ、しまった、どうしよう。ここで弟子がなくなって、食えんようになったらどうしようと思うと、ますます冴えてきます。普段そんなことは忘れてるんですよ。いやあ、もうこれで食えんようになったら年もいつてくるし、今のように体も動かんようになってくるし、これで弟子が一人も来てくれんようになったら、もう飢え死にするよりしょうがないなと思う時があるんですよ。一人になるとますますこう思うんです。ところがまた喧騒の中にいると忘れます。

それと同じで、かえって逃避をすると余計に心配になってくるのです。それが「山にても憂か

らぬときの隠れ家や」。山奥へ逃げているのだけれど、憂いが晴れぬ時はどうしたらいいかな。そうしたらいつそのこと、その喧騒の原因の都の中へ帰ってきて、その代わりそのうちの一区間。四畳半くらいだけは、もう絶対にその中にいる時間だけは考えない。集中する訳です。

もう障子1枚、建具1枚の外は都市、世間のストレスの世界なのですが、そのタイトロープがあるだけに集中する訳です。外に出ても静かだとかえって緊張感がなくなり、集中力がなくなる。ところが、一步間違えばまた踏み潰されるというような世間の中において、一角だけをそういう別世界を保つようにすると、非常に神経が内へ内へと集中して、それで結果的に気が晴れるというのです。「都の中の松の下庵」。喧騒の中へ戻ってきて、そして屋敷の中の松の下に小さな四畳半くらいの庵を編んで、そこで自分の別世界を作る。そういう習慣をするようになったら、かえって憂さが晴れたというのですね。

それが「市中の山居」という考え方で、非常に室町の後期、それから戦国の時代にかけて京都を中心に流行った。ある程度の文化層、文化人たちの間でのことですが、そういう支配者たちの階級では、「市中の山居」という考え方が非常に流行した。それが今の茶の湯の根本思想になっているのです。

## 喧騒の中の別世界

私も一度面白いところで経験したことがございます。今からもう20年ほど前です。今日は大河原大使もお見えになっておられますが、ニューヨークの国連本部に桜がございます。あそこでお茶会をしてくれということになりました。残念ながら桜は咲きませんでした。雨が降っておりまして、寒くてさっぱりでございました。当時、JALさんなど飛行機会社さんはまさに羽振りが良かった。エセックスホテルというのを買収されて、立派なホテルを持っておられました。その最上階をJALさんの好意で取っていただいて私は寝泊りしていたのです。一緒に20人から30人行ったものですから、小さな茶箱のセットを持って行きました。雨の日はどこも外へ出ることがなかったのですが、セントラル・パークが非常に良く見えるのです。またはマンハッタンの、いわゆるフィフス・アベニューとか、そういうところが良く見えるところであります。

それを見ながらお茶を点てておきますと、不思議にそこだけが別世界になるのですね。ガラス1枚外は、それこそ世界の大会のニューヨークであります。ただ、セントラル・パークの方は緑が見えます。反対側は非常な喧騒です。その中でお茶を点てて、皆で話しておりますと、不思議にそこだけが浮き上がるのです。

ああ、これはやっぱり、山の中や田舎やら行ったんでは、できん雰囲気やな。「市中の山居」と言いよったんも、おそらくこういう本当の喧騒の中の一部を創ってこそ、気持ちが別世界に行くんだな。別世界にいたのでは、もう別世界になる必要がない訳です。そういう、本当にストレスの塊の中でのごく一部、いわゆる忙中閑ありです。そういう気持ちを創るようになったら、これは上手くストレスが乗り切れるのだなという経験をしたことがあります。

まさに、今日お話しした「市中の山居」というのは、まったくその思想でして、その中でやりますからこそ、皆、赤裸に、しかも当時武士たちは刀を外します。武士が寝る時も抱いていた刀を外すということは、まったく裸になるということです。ローマ時代、貴族たちがカラカラ浴場で素っ裸になって、いろいろ政治論議をしたと言いますが、あれとも似たような共通した心理で

あります。そういう中で人たちが、わずか4時間ほどではありますが別世界を創った。

実は、利休がした一番の仕事はそれだった訳です。秀吉政権を樹立するために、その四畳半の空間で、秀吉の国づくりの一番中枢の部分の場を演出した訳ですね。だから当然機密を知ることになりますから、利休は切腹という当時の極刑。しかも名誉ある。彼は商人ですから、気に入らないことがあれば打ち首、はりつけで良い訳ですが、切腹という最高礼式でもって殺されねばならなかったのは、やはり当時の国家の最高機密を知り過ぎたと言うことですね。

具体的には朝鮮出兵に関する事で、利休はちょっと影響を受けて殺されてしまう訳ですが、そういう悲劇の死を遂げましたのも、利休がやはり茶の湯を非常に政治的に使ったということ。しかし、それだけに利休は全身全霊をかけて創意工夫をした。その結果が、実は今、茶の湯の中に残っているということでございますね。

### 現代に受け継がれる「茶事」

そういう緊張感のあるものではございませんが、利休がした茶の湯を400年後にその根幹だけを受け継いで、今でもやっているスライドを少し持ってまいりました。実際、私の話よりも、目で見ていただいた方が良いと思います。4時間ほどの正式の茶会です。茶の事と書いて、茶事と申します。



図-1

〈図-1〉これは京都の武者小路通。ですから武者小路千家というのです。このもう少し向こうに京都御所がございます。皆様のおみ足ですと、5分くらい歩かれますと京都御所の西端に出ます。昔は京都警護の侍たちが住んでいたのもその名になっておりますが、実は「市中の山居」という発想のもとになった三条西実隆さんという、それこそ和歌の大先生がおられるのですが、その人が住んでいた屋敷跡もこの辺りにありました。

この夏に茶室をいじりまして地面を掘りました。今は大変びっくりするようなことなのですが、昔は壁にワラを入れましたから、そのワラの年代を推定しますと時代が分かるのです。火事に遭った壁土が出てきて、そのワラを分析しますと間違いなく室町後期のものだと言っておりました。ここには間違いなく、室町後期には町があったということですね。

京都はこの場所に御所が移りますのが、ちょうど室町の中頃でございます。それまでは江戸時代にできた二条城というお城がございますが、あれの北側に御所がありました。ですから紫式部などが活躍した時は、今の御所ではございません。二条城の北側にあります内裏御所で活躍をしていたのです。御所がこちらに移りましてからできた町でございます。



図-2

〈図-2〉これが正面でございます。「市中の山居」です。そういう雑踏の町ですね、本当の街中です。ここに門がございます。まずこの門をくぐってもらうのです。そうすると一転、先ほどの通りと塀1枚です。格好良く言うと山里ふうの演出がしてある訳です。



図-3

〈図-3〉これは、今日は3人にしてございますがお客様です。普段5人くらいでやるのが普通ですが、3人のお客さんが来ておりこのご老人がメインゲストです。



図-4

〈図-4〉このような山道の風情を歩かせて行く訳で、決して真っ直ぐになっていません。ジグザグの道を歩くようになっております。





図-5

〈図-5〉これは空堀というもので、茶庭の池は絶対に水を入れないのです。鞍馬石と言いますが、こういう丸い真黒な石を敷いております。黒い石で水をデフォルメしている訳です。これに水を入れてしまって、それこそ中に100万円くらいのコイを放り込むと自慢にはなるのですが(笑)、もうそれだけの池になる訳です。このような抽象をしてしまうことによって、これで水を表すことによって、場合によってはこれが大海にも揚子江にも思える、いわゆるイメージが広がる訳ですね。

だから、茶の湯というのは非常にアバンギャルドなのです。具象性があまりないようにしてある。その人によっていくらでも、なんとでも想像してくださいというキャパを広げてある訳です。これを空堀と言いまして、茶の湯の庭ではこれが原則なのです。さらに進むと先ほどよりも一回り小さいミドルゲート、中門というのができております。



図-6

〈図-6〉この中の老人がホストでこの手前の老人を呼んでいる訳ですが、ここで初めてこのように無言で挨拶をする。ここで「よう」なんて話かけちゃうと、もうガーっと崩れちゃう訳ですね(笑)。良く言う人がいるんですよ。「よう久しぶり。この前貸した金、返してや」なんて言われると、もう全然それは別世界にならん訳です。



図-7



図-8

〈図-7〉 〈図-8〉 ここで手を清める。水で清めるといのは、日本の神道の思想が入っている訳ですね。そして席へ入ります。



図-9



図-10

〈図-9〉 〈図-10〉 ちょうど秋のテーマ、峨眉山月です。中国の峨眉山に連なる山。だから今日は秋の風情を一つのテーマにしていますよ。どうか中国の峨眉山へ行った気分になってくださいと言っている訳ですね。



図-11



図-12

〈図-11〉 〈図-12〉 いわゆる和食の基本である懐石料理が出るのですが非常にシンプルなスタイル。今は食事の数が増えておりますがシンプルであります。



図-13

〈図-13〉当然、お酒も出ます。むしろ、お酒をたくさん飲んでもらう方が濃茶はおいしいのです。かなりお酒を飲みます。



図-14

〈図-14〉これは煮物と言いまして、実はこれがメインディッシュなのです。京都ですから、これは多分ハモの名残ですかね。それにもう早いマツタケを入れてございます。



図-15



図-16

〈図-15〉 〈図-16〉 そしてこういう強肴。強い肴と言いますから進め肴。何を進めるか、お酒を進めるため。お酒を飲んでもらうための料理がしばらく続く訳です。



図-17

〈図-17〉 これもそうです。これは八寸。よく料理で八寸と書いてございますね。これが原形でして実はお酒のための酒の肴なのです。必ず海でとれたもの、山でとれたもの、山海の珍味をこのように出す訳です。



図-18

〈図-18〉 そして、初めてここでホストも出てきて一緒にお酒をいただく訳です。飲みっこして行く。いわゆる杯を頂戴して行く訳です。



図-19

〈図-19〉 さんざんごちそうとお酒をいただいて休憩した後、時間が経っておりますから炭を直します。もちろんお湯をかけてあるのですが、2時間ほどかかりますのでもう火が落ちておりますのでこうして炭を改める。炭点前と言います。



図-20

〈図-20〉 炭がやがて熾ってまいります。



図-21



図-22

〈図-21〉 〈図-22〉 その間にお菓子を食べていただきそして休憩がある訳ですね。私は今は禁煙しておりますが、この間にタバコなどを吸うとその味は忘れられません（笑）。ですから、あと1年くらいが寿命と言われたら、この時に大いに飲んでやろうと思うのです。



図-23

〈図-23〉 そうすると今度は掛け物の代わりに花がある。先ほどの掛け物はいかにも高僧や偉い文化人が書いたものなのですが、人間の書いたものよりも自然のものが上なのです。これから濃茶を飲む大事な儀式があるのです。その時は人間の書いたものは一切省く。こういう自然のもの。と言いますのは、花というのは昔から中国や日本では仏様を象徴する訳です。皆が平等に頭を下げるものをここへ持ってくる。



図-24



図-25

〈図-24〉 〈図-25〉これが濃茶をするためのセッティングです。このように一定の儀式に従って、ゆっくりとした点前をいたします。



図-26

〈図-26〉このように、攪拌するのに大変技術が必要な訳です。



図-27



図-28

〈図-27〉 〈図-28〉できあがったのがこのお茶です。これが先ほどからお話ししている、5人分くらい入ったお茶でございまして、普通の薄茶の5倍くらいの濃さ。舌は甘みを感じる側面がございませぬ。そこへ到達しないと甘みを感じません。甘露という言葉がございませぬが、本当に甘露な味がいたします。



図-29

〈図-29〉 このように回し飲みで飲んで行く訳ですね。

その後は皆さんご存知の薄茶を飲む。いわゆる口直しです。やはり濃いです。植物性ではありますが相当脂肪分もありますから、やはり口が粘る訳ですね。その後は薄いお茶をいただきます。



図-30

〈図-30〉 部屋も先ほどの緊張した狭い部屋から、こういう広い部屋に移ります。煙草盆が出ておりますが、茶席で煙草盆が出るのは気楽にしてということです。濃茶の席では絶対に出ません。見えますか？座布団も敷いておりますね。先ほどは座布団は敷いておりません。ここはもう非常に気楽に談笑して欲しいという部屋なのです。



図-31

〈図-31〉 それから、これでお別れでございます。玄関まで送って行ったりはしません。無言で挨拶をして別れる。一期一会。今度いつお目にかかれるか、それは分かりません。無言で挨拶をしてこの方たちの姿が見えなくなるまで、この亭主は送り続ける訳です。それで終わりです。未練がましいことはしない。客もあまり振り返ったりはしません。そしてまたできれば次にお目

にかかれる機会をという期待を抱きつつ、茶会、一会の会が終わる訳です。

お時間の関係で、駆け足になりました。かえって皆様をご混乱させたと思います。急に利休時代から現代の茶会の方へ飛びましたものでご理解を妨げたと思います。先ほども申しましたように、少なくとも500年近い歴史を1時間のコンパクトの中に納めさせていただきましたもので(笑)、ちょっと隔靴搔痒の感はございます。また後ほどいろいろご質問をいただいて、そのメイクアップといたしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

## 〈MEMO〉

■このレポートは本田財団のホームページに掲載されております。

講演録を私的以外に使用される場合は、事前に当財団の許可を得て下さい。



発行所 **財団法人本田財団**

104-0028 東京都中央区八重洲2-6-20ホンダ八重洲ビル

Tel.03-3274-5125 Fax.03-3274-5103

<http://www.hondafoundation.jp>

発行者 伴 俊 夫